
恐ろしくも愛おしい僕らの美談

伊藤あおい

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

恐ろしくも愛おしい僕らの美談

【ZPDF】

Z9129F

【作者名】

伊藤あおこ

【あらすじ】

少女『翔』と少年『日野』が図書館の奥の特等席で織りなす異端な青春。

第1話・君の風船

「なあ、翔」

なに、と翔と呼ばれた学生は、すつと今まで読んでいた分厚い本から顔をあげた。

「どうして彼らは、あんなに頑張つているのだろうね」
唐突に質問を翔にぶつけた日野は、視線を薄らとした光が射す小窓の先に向ける。

そこには広々とした運動コートにひしめく、大蛇の如く連なりすべてを統一された少年少女の無数の足。それは何度もぐるぐるとコートを周回する。

全員のリズムを揃え、自我を押し殺し、青春の輝きといつ名の老廃物を垂らす。

日野はそんな様子が滑稽に思えた。そして同時に不快を感じた。
「惰性的だ」

日野がそうしているよに翔も外を見つめた。

「それってどんな皮肉・・・」
「あんなの、つまらなくないのかな」
「そりゃあ、つまらないのでしょうかけど、好きだから続けられるものじゃない？」

日野は納得できそうになく、

「俺ならこれ以上自分を苦しめたくないけどな。あいつらが決心したことには違いないが、わざわざ休日にも強制的に集めさせられて、自由を奪われているように見えなくもない。きっと今までこれからもこの世界に踏み入れたことでの後悔で自分の首を絞め付けるやつらがあの中に何人もいるんだろうな。強くなりたくても強くなれない。そして、辞めたくても辞められない。」
と言い放った。

「癡者・・・」

日野は背を屈め、苦笑し、動かなくなつた。

先ほどから日野は生氣を失つたかのように俯いたままだ。

「日野君……」

返事はない。

日野はまるで、何か田には見えない異物に背中を押しつぶされているようであつた。

翔はそれを想像した。日野の上に乗つかつている大きな風船。そしてその中身は決して覗くことができない真っ黒で丈夫ななゴム。その風船には重りが入つていてそれは最近、遞増しているようだ。その風船を私の針で刺してしまえば、一瞬にして日野を解読することができないだろうか。

だが翔はそれをしようとは思わなかつた。

「今から日野君のことをあだ名で呼ぶことになります」
いきなりの翔の話題にびっくりと日野の体が反応し、ようやく顔を上げた。

「それは光榮だ。どんな名前を押借できるのか楽しみだな」と、これ以上翔を苛立たせるつもりはなかつたので、日野は少しでも期待をしている素振りをした。

「ナーバス日野」

「ナーバス日野に襲名された率直な気持ちをお聞かせください」
「・・・」
「気に入らなかつた?」

「センス悪い」

「センスなんて、そんなのどうだつていいじゃない。そもそも、性別、年齢、性格、人種や文化、個人が生まれ育つた境遇などによって、その人の感性が異なつてくるものよ。一概にセンスの良し悪しを決めつけて評価されてもらつては困るわ」

「はいはい」と日野は適当にあしらつた。

「確かに俺、最近神経質かもしけない」「ようやく気付いたのですか」

日野に何があつたかのかは知らないが、干渉はしない。相手の口から発するまで、詮索はしない。

普段の生々しい喧騒から逃れるためにこの場所にいるので、あえて相手の傷に塗を擦りつけるような行為はタブーである。

「モシュのシュークリーム」

は?と日野は怪訝そうな顔をする。

「モシュのシュークリームが食べたいの」

翔は本で顔を隠し、ぶっきらぼうに告げた。

モシュとは、明らかに、日野の面前にいる女子が好みそうな、この学園が建つてゐる街にあるこじゅれた洋菓子店である。

「わかつたよ・・・

とため息交じりに日野は承諾する。

ふふつと口元を緩めた翔はバタンと重厚な本を閉じ、近くにあつた本棚に戻しに行つた。

ここからモシュは徒步10分。

只今5時半。6時には閉店するはずなので、急がなければならぬ。翔が日野にデザートを要求する際、望みが叶わなかつたときの翔はとてつもなく不機嫌になる。今日もその可能性が無きにしも非ずと

いつた時間帯なので日野は焦った。

頼むから、売り切れていないでくれと、日野は自分のリュックを背負い、ついでに翔の革のバックを机から掘み上げ、急ぎ足で翔のもとへ向かった。

第2話・侵入者

「「めんつて・・・」

謝罪した日野だったが、相手の返答はない。

今日でこんなやり取りは何回目になるだらうか。

先ほどから日野の問いかけには全く反応せず、年季の入った本から翔は視線を放さない。

まるで幼児がお人形に対し、会話が成立しないとわかっているのにも関わらず、話しかけてくるようだ。

「翔ちゃん？」

今度はおどけてみる。

日野は知っていた。翔の本のページをめくる手が、日野が謝り始めてから一切動いていないということを。随分と心残りがあるのだろう。

「シュークリーム食べたかった・・・」

首をかしげ、下を向き、ようやくか細い声を鳴らした。昨日は閉店前にケーキ屋 モシュ に着いたのだが、肝心のシュークリームは売り切れていたのだった。

「わかつてる。今日は早めに行こ「うな」

だいぶ落ち込んでいる翔をこれ以上不機嫌にしてはならないと宥める。

やつと目を合わせてくれるようになった翔がほつとしたのもつかの間、翔は上目遣いをしながら

「えー、でもまだこの本ぜんぜん読んでないのよね」

と、けろりとしてみせた。さらに「まだここにいたいな」とでも言つているように透き通つた目で懇願する。

モシュ の前で別れた時から、ずっと胸に絡み付いた困惑をあつたり踏みにじられた日野はおもいきり顔を引きつらせた。

「この小娘が！」

「ナーバスうるさいわよ、ここをどこだと思っているの？」

それほど日野の声は大きくなかったが、翔は発言の内容に少々腹を立てたようであり、自身のサンクチュアリでの日野の行為を蔑み、制した。

この場所は下階と違つて、自然体で話しても咎められないくらい、誰も人が寄つてこない。

「もう知らないからな」と言つて、日野はそっぽを向いた。

「シュークリームはー？」

「・・・・・」

些細な争いも明日になればまた同じ時間、同じ場所で出会い、心をぶつけ合ひ。

翔と日野がこうして放課後に互いの存在を認め合ひようになつたのは遡ることおよそ3カ月前。

2人がそれぞれ、誰ひとりとして自分の境界線への介入を許していなかつたとき。

解放の合図が鳴り響く校舎を飛び出し、急ぎ足で向かう翔。窮屈そうにしている革張りの鞄を時折足にぶつけながら、図書館にのびる石畳の上をひたすら歩き続ける。

もうじき初夏を迎える。小道に沿つて力強く青々と生い茂つている木々が館へのカウントダウンをし、とつておきの場所へ導く。

翔の視界に入ってきたそれは、古風な趣が溢れんばかりの巨大な建物。

明らかに年季の入つたそれは、今までにどれだけの人間の感覚を引きつけてきたのだろうか。

古く重厚な扉を前にし、一息ついて翔は大きな手すりを力強く引く。

扉から徐々に現れる世界は翔のすべてを虜にし奪い取り、無限な可能性を露わにして、翔を絶望にさえさせる力を持っている。

体育館ほどある建物を所狭しと埋め尽くす膨大な書籍。

点在する小窓から放たれる纖細な光は、厳格な空間を存分に引き立たせ、リアルワールドからお伽話へトリップしたような雰囲気さえ感じられる。

・・・すごい

ここに通うことの日常の習慣にしている翔でさえ、思わず感嘆してしまった。

決して不快感を与えることのない紙特融の自然な香り、それは翔の祖父母の香りを彷彿させ、翔を優しく包み込む。

本の滝が絶景を映し出し、時が止まつたかと錯覚しそうなほどの閑静さ。そして当時の建築士が生み出したセンスが散りばめられる光と影のコントラスト。翔は自らの五感を活動させ、身体に沁み込ませるよつに記憶させる。

出入り口から少し歩き、左側に設けてある貸出カウンターに向かつ。

「こんなにちは

「こんなにちは、今日も早いわね」

と、図書のお姉さんとこつもの日課となる挨拶をかわし、安息の場所へと歩を進める。

翔の特等席はカウンターの近くに構える小さな階段を上り、奥へ奥へと進んだ先にある。

そこには木製の小さな机と背もたれが長めにデザインされている椅子が小窓ごとにひと組ずつ壁に寄り添つており、

巨大な館内に不思議と閉塞的な空間を創り上げている。

毎日のよつに楽しい時間を過ごす席は、後ろから3番目。

その位置の用はバランスの問題であり、翔が席に着いた時の、いかに図書館と自分を一体化できるかとい点で、翔なりに熟考した結果

だ。

背の高い本棚をいくつも潜り抜けたその先。

だが今日は翔の特等席の前に見知らぬ男子がいた。

まだ放課後が始まつたばかりのいつもは閑散としている時間帯であり、

下階のフロアには同書以外の気配すらしなかつたはず。

二階には比較的需要が低い書籍ばかり揃えられており、現代の学生の興味はあまり期待できそうにない。

なぜなら、悲哀と希望で満ちた時代を駆け巡ってきた貴重な本を後世へ残していくという保護活動の一環をこの図書館は担っているからである。それらは埃を纏うことなく、視覚的に普遍的な存在感を人々に与え続ける。

しかし、そんな時間帯、そんな場所になぜ。

ただの偶然にしては、胸騒ぎがした。

もちろん想定外の不自然な状況にもやもやした気持ちはあったが、翔はそれ以上に、特等席だからといって、数ある席の中でも男子学生の後ろの席に座るという行為、即ち、相手に与える翔側が引き起こす不自然さも自重しておきたかった。

翔が想像する、男子学生に与える圧迫感と第三者から見ても少し気になるような光景をつくるのは避けておきたい。

何より、男子学生のために翔の「ティティールにこだわった自分のルールを変更することが苛立たしい。

羞恥や怒り、焦りと倦怠感が一気に雪崩れこむ。

あれこれと模索した挙句、翔は特等席に座ることを一度あきらめ、気を取り直して本を探すことにした。

第3話・感情には抗えない

相変わらず、見ず知らずの男子学生は顎を乗つけた片腕を机につき、呆けた顔で外を見つめている。

翔は気を取り直し、「気になつていたあの本を探そう」と意気込んだが、天井まで続く書籍を目で流し見るのに精一杯だった。副次的なことだつたから仕方ない。

時折、男子学生とシルバーの小柄な腕時計を交互に凝視しする。即刻立ち去つてほしいという願いしか念頭に置けていなかつた。

翔は、この場所が学園内での公共物であるということは言われるまでもなく理解していたが、以前からのあまりの人気の無い閑散さで、勝手ながら「ワールド イズ マイン」を唱えていた。

あれから1時間が過ぎ、他者との接触に足踏みしていた翔も、そろそろ肝心な要諦を見逃さずにはいられなくなつた。

早く取り戻したい。

翔は深呼吸をし、腹構えを決めた。

慎重かつ自然体な行動をとりながら相手の方に近づいていく。

開放的な2階に連なる、壁に設置されている書架以外のそれらは1台約5メートルの横の長さがある。本棚は翔の現在地点から男子学生まで5台連なつており、通路も含めると距離は約30メートル。

翔が見渡した様子では、現在2階には翔と男子学生しかいない。司書は1階にしか常置しておらず、人の気配は空しい。2階から下へは見下ろせるが、まだ放課後の合図も告げられたばかりだ。早々にここへ足を踏み入れ、熱心に本に興味を寄せるものはいなかつた。男子生徒の方向へ一直線に進むことはさすがに厳しい。前後にも備

え付けられてある書架を含め、それらに沿いながらランダムに蛇行して行かなければならぬ。

現在、標的からおよそ20メートル付近。興味のある素振りをして、適当な書籍を手に取つてみる。彼を確認。反応はない。

思い切つてさらに10メートル進む。

平常心を装つとするにつれて、無意識に緊張が進る。ほじぱし

翔は悟つていた。これは無意味な緊張だと。自分自身しか感じていない、何事にも影響も及ぼすことはない無駄な感情。感じるだけ損だと。

それはまるで、ふと過去の羞恥を思い出し、後に、「今更後悔しても、誰も覚えていないのに」と開き直ろうとしながらも己の甲殻内で葛藤し、なかなか自己完結できずといった症状。

翔はそんな状況を生み出す自分についても嫌悪する。

身体から込み上げるものを払拭しようと試みるが、それでも一度意識するとさらに身体が反応する。その現象に、気づいた時にはもう遅い。足が震え、僥々魄い害虫らが踵から湧き上がるかのように悪寒が翔を襲う。

思わず目を見開き、息をのむ。

不覚。「また自分で追い込んでしまった」と悔やみきれない。

自らを鼓舞し、正常を取り戻して慌てて書架に手を伸ばし体を支える。

「これじゃ、駄目だ」

自然に行動しようと必死になる翔。

今のほんの数秒のアクションで、あの男子学生は異変に気付いたかもしれないと存在を確認する。

そして、今まで物思いに耽つていた標的がいつの間にか消えていた。

「大丈夫か？」

不意に頭上から降つてくる低い声に、翔の反応は遅れた。ゆっくり振り向くその先にはやはり。

翔は不意をつかれ、力の抜けた膝ががくつと下がる。下半身が重力に逆らえない。

すっと座り込む形にならうとすると同時に、バランスを崩した上半身が背後の書架に当たる。

一瞬何が起こったのかも判断できず、怖くなり目を閉じた。

幸い、それほど衝撃は無かつた。右肩が書架にぶつかり、そしてその衝撃で頭上から降つてきた数冊の本が顔や腕をかすった程度。足元を見ると、本が床に乱雑している状態だ。

翔は顔を上げると驚くことに、左腕は男子学生に引っ張られる形で掴まれているのを確認した。

翔と男子学生の繋がれている腕。信じられないとも思ったかのように凝視する。

他人に触れられた。

呆然としている翔に対し、男子学生の顔は引きつたままだ。

時計のシルバーのチェーンが掴まれている手により腕に食い込み、痛むのに気づいた。

痛みや恐怖、憎悪を感じ、咄嗟に腕を引っ込ませる翔。

「…………あ、やつ

卒然とした想定外の事態は「ミニコニケーションの障害を引き起し」す。

「・・・いやつ・・・」

細い腕を精一杯振り上げながら、全力で拒み続ける。

「落ち着け」

我を忘れている翔に目前にいる相手は氣を使ってか、穏やかに宥める。

それでも翔のリミッターは解除されたままだ。

取り戻さなくちゃ。

取り戻さなくちゃ。
試みる翔。

しかし、生まれたての小鹿。

それでもなお両手で這いつくばり、あの場所を目指す。
脳の伝達を身体が全く受け付けていない。
さらに欲望は膨らみ、身体は全く進まず。
翔の白い肌に、透き通る一筋の液体。
込み上げる吐き気、止まない嗚咽。

男子学生は場違いにも、翔に見入ってしまった。

その哀れな姿が美しいと思つた。

それはとてもとても人間的で、尊いもののように思えた。

気がつくと、床に這いつくばり抵抗する翔の肩を押さえ、半ば覆いかぶさるようになり、翔が回復するまで待ち続けた。

第4話・君に伝えたい

燐々と照りつける太陽の光線の下、己の限界に苦闘していると少女たちをよそに、日野と翔は相変わらず彼らの城壁に立てこもっている。

「今だから言つけど、あの時の翔はひどく醜かつたな。」

「何のことかしら?」

翔はその話はできるだけ避けたいと、しつらばくれたが、日野はそんな翔を尻目に、強引に続ける。

「俺はね、驚いたんだ。別に、翔に引いたって意味じやないからな。真に受けれるなよ?」

翔は露骨に眉間に皺を寄せて、苛立つてゐる雰囲気を出す。

「だから何が言いたいのよ」

「俺は感動した。この歳になつて人が理性のままに自分のものを守らうと必死になつてゐる姿に。床に這いつくばつても死守しようと/orする姿にさ。しかも、まるで他人に自分の裸体以上のものを見せるような恥ずかしい行動だ。だつて、いくら仲良くなつて関係をもつようになつたところで、相手にあの時のように取り乱した姿見せるなんてことがあるか?」

「日野君変態さんだつたの?早く言つてよ。1110と1119のどちらが良い?」

「まあ、なんとでも罵つてくれてかまわない。一応、悪辣なことを言つてゐるとは十分承知してゐるからな。それなりの仕打ちは仕方がないと思つてゐる。それでも聞いてほしいんだ」

「期待のSMオールラウンダー新人」

2人は全くかみ合わない会話を展開する。

「話が逸れるが、こんな歳になるとどいつもこいつも格好ばかり気にしてて、痛々しいんだよ。みんな、いかに人に好かれるかを考え

てるばかり。友人をつくるにしても、恋人をつくるにしても、とりあえず周りの体裁を優先する

「シャツの袖口汚いわよ」

「彼らは他人の前で、声にならないような声で懇願し、嗚咽を繰り返して、後先も形振りも構わず何かを守るうとすることがだらうか。それも自分の利益のためだけにだ。他人も含む事態だったたら、傍観者も『相手のためにここまでできるなんて』と、納得せざるを得ないだらう。しかし、そのような保険もない状況だつたら？」

「日野君。私ももうちょっと保険のこと考えようかな？さつきから身体のあちこちが痛いの。とっても痛いの。もしかして痛風だつたらどうしよう？」

「そして、何を話しているかと思つたら、男女関係なく、一言田には『きもい』だの『うざい』だの、もう飽き飽きだ。奴らは汚い翔の表情が真面目になり、そして一層暗くなつた。

「私もその考えには頷けるけど、日野君はさつき私に『醜かつた』って言つたわよね。彼らが『汚い』ならわたしも日野君にとつては同じ存在なのね。私にとって日野君の存在はウシガエル以上、ガマガエル以下といつたところかしら」

翔はますます自棄になつてくる。

しかし、翔の態度や言葉の猛攻をも日野は甘んじて受けるようだ。饒舌になつてきた日野は翔にはお構いなしに心中を打ち明ける。

「違う、翔のあれは全く違つた。そしてわかつたよ。醜いと美しいは表裏一体だつたんだなつて。例えは俺、今でもミロのヴィーナスの美しさつて理解できぬけど、ミロのヴィーナスの価値つてこういうことを言つてゐるのかなつて。腕の無い不完全さが素晴らしいとか騒いでるだろ？あのときの翔も、人間としての不完全さ、不安定さが爆発したんだ。『芸術は爆発だ』つて、こういうことを言つんじやないか？」

自身の理論を説いた日野は翔の反応に期待した。

「もうすぐ夏休みだつたと思うけど、今日の図書館寒いね」

相も変わらず、翔は日野の哲学を受け入れるといった姿勢は取らつとしない。

「俺も悪かつたと思つてる。」の場所に座つてたら、翔はどんなアクションを起こすかなつて。それだけだつた。まさかあんなことになるなんてね」

「私がよくこの場所に居るつてことを知つてたのね・・・。若干この歳にして、変質者の仲間入り? いつもしているつたりとも盗撮とか、盗聴とか・・・怖い・・・」

まさか、と机の下を覗き、窓の様に日を配り、丁寧に辺りを見回す翔。

これは初夏を感じさせる液体なのか、それとも翔の攻めが効いてきた液体なのか、珍しく日野の額に込み上げてくるものがある。

そろそろ翔の怒りも臨界点を突破しそうだ。

そんな翔を見かねて「そして、これだ!」と大きな白い箱を取り出した日野。

その中身は自分の罪を少しでも軽くしようつと日野なりに考えた形であつた。

「何、これ? こんなものに惑わされないわ。こんなもので許しを請おうとするなんて日野君は汚い」

「言つただろ。汚い、即ち醜いと美しいは表裏一体だつて」

「どういう意味?」

翔はかなり立腹だ。

日野は白い箱の名から一度良くなえていただらけの色とつづりのゼリーを取り出した。

「僭越ながら、私が作らせていただきました」と、真面目な顔で、両手で翔にスプーンを渡す。

「ぐくりと喉を鳴らせ、田の前に自分のためだけに作られたゼリーと先ほどのひどい扱いの狭間でしばらく葛藤する翔。

やはり理性は止められない。スプーンを受け取つてしまつ。
おそらく巨峰味であるアーティザリーを手にし、目線まで持ち上げた。
透明な容器に入つてゐるそれは、目の前にいる日野を映し、小窓からこぼれる光はきらきらと艶やかな紫色をさらに引き立たせる。

「美しいわ」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9129f/>

恐ろしくも愛おしい僕らの美談

2011年1月15日02時47分発行